

高校1年 国語総合 古文を「自分で訳せる」喜びを

～やったらできた！を体験させ、やればできる！気持ちにさせる古文学習の工夫～

教育エジソン

国語総合は全員必修の基礎科目であるから、その中で古典を扱う場合には、古語辞典や古典文法にこだわるより、古典をおもしろいと思う体験をさせ、古典への親近感を持たせることが基本だと考える。

生徒が自ら古語辞典を引いて現代語訳を作り、それを前提に進めるのが、昔ながらの授業であるが、学校によって、それが無理な場合もある。では、どうしたらいいか。そこで陥りがちなのは、教師が訳し、解説し、生徒はそれを理解し憶えるだけ…という授業。しかし、それだけでは、古文をおもしろいと感じさせるのは難しい。生徒の実態に即しつつ、なおかつ生徒が自分で古文を現代語訳でき、わかるという喜びを体験させたい。そのための授業の工夫である。

1) 準備

教科書の本文を細かく改行したものと、文中のすべての古語に現代語訳をつけた「カンペキ単語帳」をその上につけたプリントを用意。B5で印刷し、余白をカットして、ノートに貼りやすい形にする。スティック糊も用意。

2) 生徒の作業

大学ノートを縦開きにして使用する。上半分のページにプリントを貼る。

カンペキ単語帳を参照しながら、一行ずつ、自分で現代語訳を作って、下のページに書く。(ノートの罫線を気にせず、本文の下にその訳が来るように書く)。

3) 生徒の反応、授業の様子

この授業は、昼夜間定時制高校での実践だが、生徒達は例外なく、この作業に取り組むことができる。この後の授業では、(あたかも全日制中堅校のように!) 順に指名し現代語訳を求めると、生徒たちはすらすらと答える。教師も生徒も、ハイレベルな授業をやっている錯覚(?)に酔う。→これは、悪いことではない。

「このやり方でよくわかった」と多くの生徒が言ってくる。「やったらできた」の実感で、古文はわかる、わかるから楽しい、という雰囲気になり授業が進む。

4) その後の改良点(自宅学習習慣の促進)

最初、訳文を書く作業をすべて授業中にさせていたが、次の年から最初の1枚だけ授業で訳し、次のプリントを宿題にした。すると、「やればできる」ので、喜んで取り組んでくる生徒が多い。その結果、予習で訳してきていることを前提に授業ができるので、まさに「全日制中堅校のように」、授業が進むことになる。

ノートのページ

鳴長明 方丈記『ゆく河の流れ』 教科書P234

←プリントを貼る

(カンペキ単語帳)
・「ずして」なく
・「あらず」ではない
・うたかたは泡
・かつ、かつ 一方ではくしま
・結ぶ(泡が)できる
・久しく長く
・たりたる している
・ためし(例) 先例
・人とすみかと 人とそのすみか(住居)も
・かくのごとし どのようなか?
↓問) どのようなか?
・たましきの都 教科書参照
たましき(玉宝石)を数き語めたように

本文
ゆく河の流れは絶えずして、
しかも、もとの水にあらず。
淀みに浮かぶうたかたは、
かつ消えかつ結びて、
久しくとどまりたるためしなし。
世の中にある、人とすみかと、
またかくのごとし。

たましきの都のうちに、

ノートのページ

ゆく河の流れは絶えずしてがなくて
しかももとの水ではない。
淀みに浮かぶ泡は
一方では消え、また一方ではできて
長くとどまっている先例はない。
世の中にある人とその住居も
また、このようである。